

平成29年度 校内研究と職員研修の成果と課題

十日町市立十日町小学校

1. はじめに

当校は、素直で、活力に満ちた児童が多い。このような児童の姿の背景には、学校での指導体制の他に、協力的な家庭と地域の後押しがあることは、確かである。学校行事における保護者の協力、地域の方々の協力は、他校にない当校の教育活動の大きな原動力となっている。

2. 児童の実態

(1) NRT 学力検査

国語：全校平均<十小平均 算数：全校平均<十小平均 平年並みの数値

学校全体で高い偏差値を維持してきた。国語の言語事項は、全学年で定着している。その他は、学年毎に課題が違うため、実態に応じて「書くこと」「話すこと」「聞くこと」など、重点分野を設定して指導を行っている。算数では、全領域で全国平均を上回っている。

(2) 県小教研 国語：県平均 72.4<十日町小平均 算数：県平均 68.4<十日町小平均

理由や考え方を文章で伝える記述式の問題において、抵抗感なく書ける子どもが多い。そのため、毎年平均点を上回る数値になっている。

(3) 全国学力・学習状況調査

国語・算数とも、29年度は28年度よりA問題、B問題と正答率が落ちた。母集団が変わっているため一概に言えないが、NRTの結果も含め、数値学力は下がり気味である。記述式回答の無答率の低さから、習得した知識・技能を積極的に活用して課題に真摯に取り組もうとしている姿は見る事ができる。

国語A短答式無回答率（全国；2.8>県；1.7>>当校；1.6）

算数A短答式無回答率（全国；1.6>県；0.9==当校；0.9）

国語B記述式無回答率（全国；4.3>県；3.0>>当校；2.2）

算数B記述式無回答率（全国；6.4>県；6.0>>当校；5.5）

しかし、国語A以外で全国正答率を下回った。該当学年は、書くことに抵抗がある子どもが多いこと。問題に即した考え方ができず、自分本位で考えを進めてしまいがちなことが要因と考える。結果を真摯に受け止め、指導の改善に努めたい。

3. 今年度の取組と成果

29年度研究主題「かかわり合い 共に考える子ども」

副題：ユニバーサルデザインの視点を授業に取り入れ、誰もが学ぶ喜びを感じられる授業

上記の研究主題の具現を目指し、「全校体制での授業改善」と「自由な意見交流による授業の『省察』」の視点から日々の授業改善に取り組んだ。

(1) 全校体制での授業改善

① 教科の特性と子どもの実態を基にした授業

4年生国語「ごんぎつね」の教材では、登場人物の心の様子を「心の距離メーター」を用いることで、読み深めていった。ごんと兵十の心の様子を視覚化することで、一人一人が学習に参加することができた。また、なぜそのように考えたのか理由をいう必然性が生まれていた。

1年生の「算数」では、ホワイトボード、ブロックなど、各自が道具を選択して、問題を解いていた。一人一人の考えを大切に、授業を形成していることが伝わってきた。1年生の段階から図に表すということができるようになると、今後非常に役に立つと感じた。

② 子どもの思いを大切に活動

2年生の「国語」では、教科書の指導事項に載っている「したこと順」だけに限定して書かせるのではなく、「教えたい順」も選択できるようにした。探検したことを伝えるためには、「教えたい順」の方が、子どもたちにとって書きやすい、自然なのではないかという子どもの立場に立って考えているからこそである。国語科と生活科を合科し、子どもたちに必要感のある課題にした。教科横断的に学習を位置付けて、カリキュラムマネジメントをしていくことが、これからますます求められていくであろう。

③ 教材教具・単元構成の工夫で、子どもの意欲を引き出す

3年生「国語」では、短冊を用いて意見を交流することで、子どもたちの意欲が授業の最後まで持続していた。終末で友達のよさを伝える場面では、子どもたちから「オー」という歓声があがり、新たな発見、気付きがあったことが裏付けられた瞬間だった。5年生「体育」では、情報機器を用いることで、子どもたちが自分たちの動きを確認することができた。「シンクロマット」と題して、集団演技を行うことで、マット運動と表現運動の内容を同時に学習することができた。子どもたちの「～したい」を大切に活動した授業であったため、単元の終盤まで子どもたちの意欲の持続が見られた。6年生「体育」の保健学習では、「病気の予防」について、自分事として考えるための工夫が図られた。単元終盤に「命の授業」と題して、がんを患った経験のある方の講話から生の声を聞くことで、他人事ではないという意識が芽生えた。自分がよりよい人生を送るために、今の生活習慣について真剣に考え、よりよくしていきたいという意欲が伝わってきた。

④ 議論し、自己決定させる道徳

5年生「道徳」では、グループで議論し、全体で議論し、最終的に自己決定することを目的にした授業を行った。議論できる課題かどうか、何を議論させたいのか、その時間で子どもたちに獲得させたい道徳的価値は何なのかを、考えていくことが重要だと再認識させられる授業だった。

⑤ 楽しく、抵抗感なく活動させること

6年生「外国語活動」では、その時間の課題を話すこと・聞くことを通して、学んでいた。実際に一人一人が話す経験をたくさん積むことで、頭で考えて言葉にするのではなく、反射的に（日本語と同じように）言葉が出てくるようになるのだろう。また、子どもたちの様子から活動を楽しんでいることが伝わってきた。

(2) 「私の取組（レポート）」の作成

「今年度の私の取組」と題し、「ユニバーサルデザインの視点」をいかに指導に取り入れるかについて全職員がレポートを作成した。子どもたちの実態を踏まえ、誰もが学ぶ喜びを感じられるように、各自がそれぞれのアプローチ手法を工夫した。年度末には各自がそれに基づく実践レポートを作成した。

「私の取組」を念頭に置いて日々の授業を構成することで、若手職員を中心に日々の授業の構成に変化が見られた。授業の型にはめて、指導者側の教育観で教えるだけでなく、子どもたちが何を考えているかを探り、実態に即した支援の在り方を考えるようになった。

(3) 自由な意見交流による授業の「省察」

「公開授業による研修」、「教職員の見識を広げる研修」の両輪で研修活動を推進した。教職員が、自身の授業や教育観を多面的に「省察」できるよう、「意見交流」を取り入れた研修体制を構築した。ワールドカフェ形式を取り入れたことで、参加者全員が自分の考えを述べ、教育観を多面的に捉える場となった。また、各種学力調査の分析の際も、ワールドカフェ形式を取り入れた。数値学力だけでなく、その数値を支えるために何が必要で、何が不足しているのか考えた。

(4) 教職員の見識を広げる研修

授業のユニバーサルデザイン化のために、新潟大学から長澤正樹様をお招きして研修会を行った。パワーポイントの映像を基に、理論と実践の双方から見識を深めることができた。

4. 課題

(1) 学ぶ意欲の低下

元気生活1・2・3で掲げている「早寝早起き、メディア2時間以内、3品食べる」が乱れてきている。それに伴い、授業に集中できない状況がある。今まで反復学習などを含め、やるべきことをきちんとやる子が多かったが、それすらできない子の数が増えている。家庭で行う反復学習ができていないことで、授業でのつまずきが高学年を中心に見られる。結果として、学ぶ意欲の低下にもつながっていることが考えられる。授業の前段を使い、前時の復習から行うなどの工夫が必要かもしれない。

(2) 授業のUD化への取り組み方

全員でこれをやろうと決めるのではなく、目の前にいる子どもに即したことを指導者がピックアップして行う形で進めたが、経験年数の浅い職員にとっては、何をどうしたらよいかが不明確な部分がある。「課題、まとめ」のマグネット、タイマー、活動の流れ明示など、これだけは取り組むということを経験整備も含めて行うべきかもしれない。

(3) 教師のカリキュラムマネジメント

一部の教科に偏り、他教科の学習の内容を漏れないように、先を見通したカリキュラムマネジメントが必要である。年間指導計画を基に、関連付ける単元を明確にして、教科横断的な指導を心掛けることはもちろんのこと、ボリュームオーバーにならないように配慮していく。

(4) みゆき学級（特別支援学級）授業公開

諸事情により2年連続みゆき学級の公開を実施することができなかった。みゆき学級担任が対象の子とどうかかわっているかを知ること、交流担任がその子への接し方を考える一助となる。来年度は実施する方向で考えている。

5. おわりに

来年度は、新学習指導要領移行へ向けて、今年度同様に、「かかわり合い 共に考える子ども」の育成に努めていく。その際に、副題として「安心して参加できる授業のユニバーサルデザイン」を掲げ研修を積み重ねていく。